

はじめに

.私たちの研究プロジェクト(ライフデザイン・ボランティアプロジェクト)では、昨年に引き続いて大学・学生・ボランティアをキーワードとして研究を組織してきた。キリン福祉財団や京都市社会福祉協議会との共同研究プロジェクトとしてスタートして2年目のプロジェクトである。

昨年度の研究プロジェクトでは立命館大学学生のボランティア実態と大学でのボランティア環境整備にかかる政策提起として大学ボランティアセンターの構想を打ち出してきた。今年度は昨年度の提起を引継ぎながら、ボランティアセンターの具体的なコンテンツを議論してきた。本書で指摘しているボランティア活動についての情報提供のあり方やボランティアマッチングのシステムはその一つである。情報提供やマッチング作業に少し実験的に取り組みつつ、その具体的な課題を取り上げてみようとして2003年の3月から2002年度のVCTP 修了生(第4期生)の新3回生を中心に声掛け研究グループを組織してきた。本書では、大学とボランティア教学をめぐるこの1年間の情勢把握とともに、上記ボランティアコーディネーター養成プログラム(本書資料参照)を修了した学生たちを中心とした研究グループの、1年間に渡る調査研究の成果を収めている。

ボランティアガイダンスを思いついた。4月30日と5月1日の2日間。午後3時から6時まで。新入生にボランティア活動との出会いの場を創ろうと、14人の学生たちと「実験」した。準備期間はわずか10日間。ガイダンスを開くに必要なミッション、業務、役割、段取りを実際に体験してみよう。参加者がなくても成功、1人でもあればなお嬉しい。目標は控えめにした。その間、学生たちは毎昼休み集ってチラシ作りや1回生全員が受講する学部コア科目での宣伝。学内のボランティアサークルへの依頼も忘れない。かしましい教室の教壇でマイクインフォメーションした学生は「初めて先生の気持ちがあったわ。みんな聞いてくれへん」。ガイダンス受付での氏名記入者だけでも98人。40㎡ほどの小さなルームには2日間で100名を超える新入生が尋ねてきた。2回生3回生もいた。何処から聞きつけたか学外のボランティア団体や施設からもボランティアリクルートのための参加があった。次回は7月の初めの1週間。キャンパスボランティアセンターへの第1歩だ。乞うご期待!

.上記の文書は、私たちの第1回ボランティアガイダンスについてある福祉団体のコラムで紹介した際の一文である。

2003年4月、学内では学芸・学術・スポーツのサークルが行う新入生歓迎獲得のイベントが花盛りの時期。ボランティア活動も多くの新入生に知ってもらわなければならないか。ボランティア活動へ参加機運を大きく盛り上げていくようなイベントは、大学でのボランティアセンターにとっても不可欠・定番のプログラムではないか。こうして、数度の研究会を経て、ボランティアガイダンスに向けた取り組みが始まった。本書第1章は、プロジェクトメンバーたちが実験的に取り組んできたガイダンス運営のプロセスやプログラムづくり、スタッフの役割、関係組織とのネットワーク、広報や参加者組織などについてまとめている。ボランティアコーディネーターとしての業務について、ボランティアコーディネーター養成プログラムを修了した学生たちが実証的に検証しただけでなく、大学という「場」におけるボランティアコーディネーターの特別な役割と機能について、コーディネートする側もされる側も学生という当事者性溢れる具体的な提案を行っているのが特徴である。

・ボランティア活動は社会貢献から自己実現・関係性・専門性を育てていくことからすれば、その活動拠点は地域社会である。学内でのボランティア活動もこの視点で捉え直される。学生の確かな学びと成長、多様な個性もまた社会的ネットワークとボランティアプログラムで育てられる。同時に、学外からの学生のボランティア資源を求めるニーズに大学が関与して対応する仕組みづくりは、学生の確かな学びと成長という観点から十分な検討が必要である。この点では、地域への貢献策として先行しているBKCでの経験を教訓化する事が必要である。

ボランティアセンターでは、学生のボランティア資源に対する社会的要請をボランティアプログラムに再構成しながら、情報化しマッチングしていく。同様に学生活動のスキルやミッションもまたボランティアセンターによってボランティアプログラムとして社会に提供される。他にも、ボランティアトレーニングと学生派遣のシステム、社会的ネットワーク形成のため、ガイダンスやゲストスピーカー、冠講座、教育イベントの企画・開催など恒常的な連携プログラムの開発も求められる。

・本書では、大学で働き学ぶ人たちが相互に関心を寄せ合い、支え合う双方向の関係性に包まれる空間をボランティアキャンパスとしてイメージしている。そしてこのボランティアキャンパスに込めた双方向の関係性はキャンパス内に閉じ込められたものではなく、広く社会に開放され、社会を指向するものでなくてはならない。学生も大学も社会の一員であり、社会に曝され、社会との関わりなくしては一日たりとも存在しようがないからである。

このボランティアキャンパスの実現を先導していくセンターが大学ボランティアセンターである。ボランティアセンターは、学生と大学が社会に繋がるコンセントのひとつとして機能する。すでに指摘してきたように、大学で身につけるべき確かな学力と豊かな個性といった学生の学びと成長は、大学での正課での学習だけで実現しうるものではない。自治活動やサークル活動などの課外・自主活動、社会的ネットワークに支えられた学生のあらゆる活動もまた、学生の学びと成長に大きく作用してくる。正課とともに課外自主活動と社会的ネットワークへの確信を深めながら教学の内容として展開してきたのが立命館大学教学の特徴とも言われてきた。私たちの教育研究(ボランティアプロジェクト)もまた、ボランティア活動というフィールドを通して、学生の「確かな学力と豊かな個性」「学びと成長」への貢献を形あるものにしたいと考えている。このことはまた学生と大学の社会貢献という脈絡でも価値ある意味を持つはずである。

・ボランティアコーディネーターが本格的に注目されたのは阪神淡路大震災の時からである。震災被災者に対する全国的な支援活動が展開される中で、ボランティア「したい人」「欲しい人」をコーディネートしていく専門職の存在に多くの人たちの関心が集まったからといわれている。以降、人々の自由な関係性や相互支援を社会にビルトインしていくための公私の諸活動・諸施策が社会の様々な場面で展開されている。バブル崩壊という社会経済状況もボランティア・非営利組織の活動への政策的なインセンティブにもなったが、ボランティア活動が政策の補完や代替でなく、それ自身固有な領域を持った社会活動として更には新たな自己実現活動としてポジティブな国民的関心の中で語られ始めたことこそこの間の大きな特徴である。震災直後の1997年には日本政府の提案によって2001年を「ボランティア国際年」にするということが国連において満場一致で採択され、1998年に成立した特定非営利活動促進法(NPO法)の審議過程での議論も「非営利活動」という新たな概念を提起し、ボランティア論を更に豊富化・進化していくことに大きく貢献した。

・こうした国内外でのボランティア活動への関心が高まる中で、そのキーパーソンとしてのボランティアコーディネーターへの理解も急速に広がっていった。ボランティアコーディネーターとは、ボランティア活動の推進を行なう機関や団体、施設において、ボランティアに関わる人の調整や養成、関係する社会資源や環境の調整や造成、プログラムの企画や実施などを行なう専門職、をいう。ボランティアを志願する人、必要とする人を対等平等にして関係付ける専門職である。1996年3月に全国社協が策定したボランティアコーディネーター新任研修プログラム(138.5時間)やそれ

に基づいて全国的に始められた研修事業などに代表されるようなコーディネーター業務のトレーニングプログラムも複数開発され実践が深められている。立命館大学産業社会学部が1999年度より京都市社協や麒麟福祉財団、京都醍醐ライオンズクラブと共同で取り組んでいるボランティアコーディネーター養成プログラムは以上のような状況下でスタートしている。全社協モデルに準拠しながら、コーディネーター業務についている現職職員だけでなく、現役学生やボランティア組織のリーダー層を主要な対象とし、社会人と学部学生が共に学ぶシステムにモディファイした新しい教育プログラムである。学習時間も138.5時間を大幅に上回る180時間とし、インターンシップや8千字以上の修了論文等本学オリジナルプログラムも付加した。プログラム開始して既に5年が経過し、300名の修了者を社会に送り出している。

.2004年3月、立命館大学では、2004年度中にボランティアセンターを設置するという政策答申文書を発表し、常任理事会でも了承された。今後、答申文書に示されたボランティアセンターに関する諸課題が順次具体的政策として実施されていくはずである。学生の学びと成長をサポートし、大学と社会を繋ぐコンセントとして有効に機能するよう願っている。

私たちのこの研究は、(財)麒麟福祉財団及び京都市社会福祉協議会との共同プロジェクトである。大学におけるボランティア教育の展開という分野に着目され、いつも社会貢献と地域福祉についての的確なアドバイスを頂いた。心から感謝申し上げたい。

私たちもまた、ボランティアの価値や知識、技術が上手に循環していく社会の仕組みづくり(ボランティアスキルマッチングシステム)と大学の関わりについて一層の研究実践を深めつつ、プロジェクトメンバーとともにボランティア社会の実現を目指し、切磋琢磨して頑張っていきたい。

2004年3月吉日
人間科学研究所学術フロンティア事業
ライフデザインプロジェクト
代表 津止 正敏
(産業社会学部教授)